HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	叙述タイプにおける時間的限定性 ： 日本語の可能表現を中心として
Author(s)	李, 娜; LI, Na
Citation	研究論集, 19, 271 (左)-281 (左)
Issue Date	2019-12-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.19.l271
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79821
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_rjgshhs_19_p271-282_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.19.I 271

叙述タイプにおける時間的限定性
── 日本語の可能表現を中心として ──

李　　娜

要　旨

本稿は，時間軸上における時間の限定性により叙述タイプを再設定することで，可能表現の意味用法や成立制約を考察したものである。日本語の可能表現は形式的な特徴や意味用法が主として研究されてきた。特に可能の意味用法に着目して，可能の原因により「能力可能」と「状況可能」に分類することが多い。能力可能に関わる動作主の能力は，恒常的に安定しているものもあれば，一時的な状態を表すものもある。また，状況可能の場合において，ある場面において時間が明示することを叙述するものが多いと思われるが，実際には事態の全体に関する一時的な状態を表すものもある。言語研究では，時間的限定性の有無によって，叙述を事象叙述と属性叙述に二分することが多い。しかしながら，この２種類の叙述タイプに全ての叙述文を分類できない。そこで，本稿は，状態を表すものに着目し，事象叙述と属性叙述の間にさらに完了状態と未完了状態という２つの範疇を設定することを提案した。このように，従来では不明瞭である状態を叙述する文を分類できるようになった。さらに，この分類に基づきながら可能表現の叙述タイプを考察した。分析した結果，属性の観点から時間的限定性がない総称的属性を表す能力は可能表現の意味の基盤であることがわかった。そして，能力可能と状況可能との関係が明らかとなった。このような意味基盤があるため，可能表現の成立制約及「能力可能/状況可能」以外の用法も新たの観点から解釈する可能性を示した。

１．はじめに

言語研究では，文の叙述タイプに属性叙述と事象叙述の２種類があることが知られている。この２つの概念は，時間的限定性の有無が異なっている。時間的限定性がある出来事を叙述するものを事象叙述文と呼ぶ（益岡（2008，2012），影山（2012））。（１）はその例である。これ

に比べると，（2）における動詞は（1）の可能形式である。意味的側面から見ると，一時的な事態を叙述する文から主題として現れる名詞の固有的な性質を表す文となる。このような時間的限定性を受けにくいほぼ恒常的な性質を叙述する文は属性叙述文と呼ばれている。つまり，可能形式を用いることで文の叙述タイプを変えることができる。しかしながら，全ての可能表現は（2）のように属性叙述を表すのではなく，（3）のように時間的限定性がある未来の事象を表すものもある。本稿は，時間的限定性に着目し，叙述タイプを再検討することで日本語の可能表現のに関する意味特徴を明らかにすることを試みる。

（1）太郎が英語を喋っている。
（2）太郎は英語が喋れる。
（3）太郎は自転車で行くので，9時前に大学に着ける。

2．叙述タイプについて

従来の研究では，事象叙述と属性叙述との最も異なる点は時間的限定性の有無であることが指摘されている。益岡（2004，2008）などでは，属性叙述を「対象が持っている属性を述べるものであり，基本的に「主題（対象表示部分）＋解説（属性表示部分）」という有題文の形で表される」としている。また，時間的限定性を受けるか否かという点によって属性のタイプを以下図1のようにまとめている。

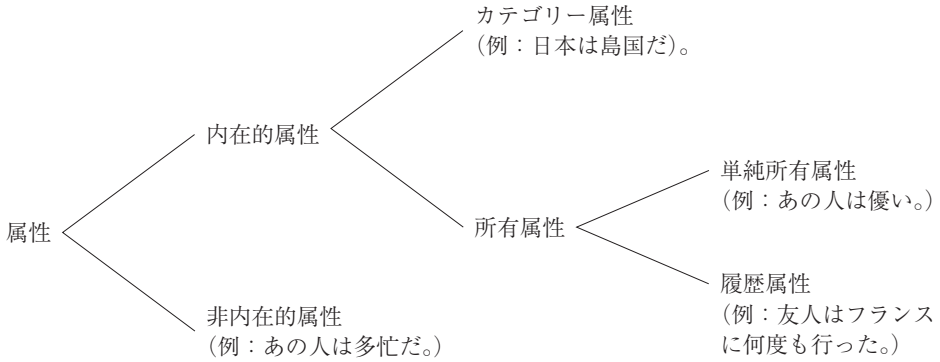

図1　益岡（2008：7）

図1からわかるように，属性を大きく内在的属性と非内在的属性の2種類に分けることができる。その内，内在的属性を典型的な属性として扱っている。この2種類の属性を見ると，内在的属性は主題の固有的性質と理解でき，非内在的属性は恒常的ではなく，時間など他の要素によって偶有的性質と理解できる。さらに，益岡（2008）は非内在的な属性を表す「あの人は

多忙だ」を名詞文「あの人は多忙な人だ」に変えると，カテゴリー属性を表すことになると述べているが，カテゴリー属性を表す「日本は島国だ」は簡単に過去時制を取らないのに対して「あの人は多忙だ」は過去時制を取ることができる。また，「あの人は優しい」という所有属性を表す文は常に時間的限定性を受けないわけではない。したがって，「多忙だ」「優しい」のような形容詞的な内容を叙述する文のタイプを再検討する必要がある[1]。その上，履歴属性の例を見てみると，文の中に時間に関する要素は明示されないが，過去にある一定の時間にあって展開した事態に解釈できるため，事象叙述にも分類できる。つまり，益岡による属性叙述は，事象叙述に解釈できるものがある。特に形容詞的な内容及び状態についての位置付けは明瞭ではない。

そこで，影山（2008）は従来の考え方に加えて，事象叙述と属性叙述を純然たる属性と準属性に分けることを提案した。純然たる属性とは時間の流れにおいて不変な性質であり（益岡（2008）のカテゴリー属性に相当する），準属性とは時間的に変動する可能性のある属性である。さらに，状態述語については，始点と終点が明示できるため，事象叙述に分類できると指摘されている。影山（2008）では叙述のタイプについて表１にまとめる。

表１　叙述のタイプ（影山 2008：27）

叙述のタイプ	事象叙述 開始・終了の時間を明示できる		属性叙述 開始・終了の時間を明示できない	
	出来事	状態	準属性	（内在的）属性
例示	彼は 2003 年に大学を卒業した。 彼女は５年間その会社で働いた。	彼は弁護士をしていた。 彼は病気だ	彼は（ふだんは）愛想がよい。 うちの息子はよい子です。	彼は（＊ふだんは）長身だ。 象は鼻が長い。

影山（2008）は属性叙述と事象叙述の下位に「準属性」と「状態」という範疇を設けている。つまり，属性叙述と事象叙述は連続的な関係にあると理解できる。しかし，ここで状態として扱われている「彼は病気だ」という事態について終点が明示できるとは言いにくい。このような表現は，過去時制において，時間の明示があるが，非過去時制であれば，今の状態を表しているため終了の時間を明示することができない。したがって，時制の関与で一時的な属性を表すものは事象叙述となる。つづいて，影山（2012）では，属性叙述を「出来事→一時的状態→属性」のように位置付けることは属性という性質を一種のアスペクトとして捉えることとなる

[1] 益岡（2012）は，非内在的属性を属性の範疇から排除し，「カテゴリー属性」「単純所有属性」「履歴属性」の３つを属性のタイプとしてあげているが，形容詞的な内容に関わる部分は益岡（2008）と変わらない。

ため，違和感を感じると述べており，また属性叙述と事象叙述は独立機能している存在と捉えるように変わった。

以上の先行研究を見ると，属性叙述と事象叙述を議論する際に，「時間」という概念が深く関わることがわかる。ただし，時制が関与する場合に，一時的状態の位置付けなどの問題は残っている。やはり，時間軸上では時間の流れと共に事態の変化が考えられるため，属性叙述と事象叙述とは独立した無関係のものではなく，連続的な関係にあると本稿では考える。しかしながら，時間的限定性の観点から，両極にあるのは典型的事象と典型的属性である。本稿は，先行研究を踏まえて，状態をさらに完了状態と未完了状態を分けて，以下図 2 のように叙述のタイプと時間の限定性との関係を設定することを提案する。時間的限定性を受けるのは，完了状態と事象である。明示的に時間的限定性を受けないのは未完了状態と属性である。その内，ある幅の時間において変化があるものを未完了状態とし，完全に時間的限定性を受けないかつ時制が関与しないものを属性とする。

図 2　叙述のタイプと時間限定性の関係

3．日本語の可能表現

3.1　可能表現の形式

冒頭で挙げた例のように「喋れる」は「喋る」の可能形式である。日本語では，可能形式を形成するには次の 4 つの方法がある。

（4）A.　可能動詞形：書ける・読める
　　B.　動詞未然形＋助動詞（レル）・ラレル：書かれる・見られる
　　C.　デキル：
　　・名詞＋デキル：水泳できる
　　・名詞＋ガ＋デキル：水泳ができる
　　・動詞連体形＋コトガデキル：水泳をすることができる
　　D.　動詞連用形＋ウル・エル：読みうる・える

この 4 つの形式の内，「ウル・エル」の形式は，加藤（2015）が指摘しているように話ことばではほとんど用いられず，書き言葉では用いられるものの頻度は高くない。子音語幹動詞には可能動詞形と助動詞形の 2 種類がある。母音語幹動詞には助動詞形の可能形式しかない。しか

し，助動詞形には可能の意味以外に受動・尊敬・自発の用法もある。このように機能負担が大きいため，子音語幹動詞の可能形式について，可能動詞形が優先的に選択される。そして，「食べられる」から「食べれる」のような母音語幹動詞に関わる「ら抜き言葉」の現象がよく見られる。本稿では，このような「ら抜き」の形も可能動詞形の一種とみなすことにする。

また，可能形式を用いる文では，動作主あるいは動作対象を「ハ」で標示することが多い。つまり，可能形式は主題を描写するものである。これは，益岡（2004，2008）における，「主題（対象表示部分）＋解説（属性表示部分）」という有題文の形となる。

3.2　可能表現の意味

日本語研究では，可能表現の意味用法は一般的に大きく能力可能と状況可能に分けられる。能力可能を表す場合において，例（5）のように動作主について能力を有することを叙述するものがあれば，動作主の能力により事態が実現できるか否かを叙述するもの（例（6））もある。この2つの例は両方とも主題を説明するものである。（5）はある種の有生物について総称的な属性を表している。いわゆる，動作主を中心としたものである。一方，（6）は動作主を含め，場面レベルである事態を中心とした状態を叙述するものである。しかし，（6）のような場面レベルにおいて，「走る」という恒常的な能力の存在が必要とされる。

（5）鳥は空を飛べる。（能力可能）
（6）今日は調子がいいから，いつもより長い距離が走れる。（能力可能）
（7）晴れた日には綺麗な写真が撮れる。（状況可能）

そして，事態の実現には動作主の能力以外に外部の別要素が要因となるものは状況可能である。ただし，状況可能の場合は，能力可能が潜在的に関わることが考えられる。例えば，（7）において，動作主には写真を撮るという動作を行う能力がなければ，いくら状況が揃っても事態を実現することができない。つまり，状況可能の実現も，ある恒常的な能力が潜在的に必要とされている。したがって，能力可能と状況可能に関わらず日本語の可能表現は，無標の場合において，ある動作主・動作対象について能力に関わる恒常的な性質を叙述する（あるいは潜在的に存在する）ものである。つまり，このような恒常的性質，いわゆる能力に関する属性は可能表現の意味の基盤となる。また，場面レベルの各事態において，このような恒常的に存在する属性を活性化するのは動作主の能力なのか，能力以外に状況に関わる要素なのかによって可能表現の種類が決められる。

3.3　可能表現の成立制約

可能表現の成立はこれまでに，動詞の意志性が深く関わることが言われてきた（寺村（1984），

渋谷（1993）など)。意志性が関与している以上，動作主が有生物しか考えられない。3.2で述べたように，可能表現は潜在的にある属性が活性化されることを叙述するものである。このような属性を活性化するには，意志性の関与が必然的であると思われる。さらに，動作主の属性や事態全体の属性を活性化することと共に，動作主または動作対象に関わる変化の過程は想定できる。したがって,「知る」や「分かる」のように元々意志性かつ変化が想定できる動詞は自発の用法があるが，可能形式を形成することが難しい。

また,「届く」のような意志性を持たない動詞について，可能動詞形はない。例えば，例（8）は「今」や「今日」のような時間の限定を受けないため属性叙述に解釈できる。ただし，この属性は動作主の属性のみならず場所である天井の属性にも解釈できる。このような天井の位置も動作主の手もどちらの属性を変化させることができない。言い換えると，動作主に関する動作性が低い。つまり，動作主自身が動作を行う際に意志が関わるが,「届く」という動詞には意志性がないため,「天井に触る能力がある」という意味が読み取れるものの，可能動詞形が作れない。

（8）この天井なら手が届く。

4．可能表現と時間的限定性

2節で見たように，時間的限定性の有無によって文の叙述タイプが異なる。さらに，叙述タイプを検討する際に時制の関与も見られる。そして，可能表現を用いることで，文を事象叙述から属性叙述に変えることができる。これは3節で述べたように，可能の意味基盤が存在するするためである。可能表現の意味用法について，能力可能と状況可能以外に，評価可能と意図成就の用法もあると指摘されている。本節では，まず，時間的限定性と関連付けながら，能力可能と状況可能の叙述タイプを明確にする。つづいて，評価可能・意図成就の用法と能力可能・状況可能との関係を整理したうえで，属性という観点から，これらの用法の由来及び叙述タイプを議論する。最後に,従来不適格と見なされる可能表現のテイル形に関する用法を考察する。

4.1　能力可能

一言で能力可能と言っても，時間との関係性は同じではない。（9）にある「飛ぶ」という動作は基本的に鳥が獲得すれば，恒常的に有することとなる。このような恒常的な能力は図2で示したように，時間的限定性を受けることがなく，典型的属性叙述の範疇に属する。すなわち，益岡（2008）でいうカテゴリー属性あるいは影山（2008）でいう内在的属性に相当するものである。

（9）鳥は空を飛べる。　（例（5）再掲）

（10）太郎はピアノが弾ける。

（11）今日は調子がいいから，いつもより長い距離が走れる。　（例（6）再掲）

しかし，能力可能は全てこのような恒常的な属性を表すわけではない。（10）のような総称的なものではなく，個別の能力を叙述するものがある。このような個別な性質は，動作主の状態を表しており，状態の継続性や時間的に変動する可能性がある。さらに，（9）に対して過去時制を取ることができる。つまり，図2で示した未完了状態である。

一方，（9）と（10）のような総称及び個別の属性に対して（11）のように完全に時間的限定性を受けるものもある。また，（11）では動作はまだ行われていないため，未来に起きる事象の予測として解釈できる。そのため，一種の事象叙述とみることができる。そして，（11）における「走る」という動作は総称的な属性に理解できるが，特定の場面において時間的限定性がある。言い換えると，恒常的な属性が偶有的な状況において一時的な出現と解釈できる。すなわち，（9）と（10）は動作主がある能力に関わる属性を有することを叙述するものであり，（11）はある能力に関わる属性がどのよう出現するのかを叙述している。つまり，能力可能には3種類の叙述タイプがある。その内，総称的な能力を有することを表す能力可能は属性叙述であり，個別的な能力を有することを表す能力可能は属性叙述に近い未完了状態を表すものであり，場面レベルにおける能力可能は事象叙述となる。

4.2　状況可能

時間軸上の展開と共に能力可能には属性，未完了状態及び事象の3種類の叙述タイプがある。つづいて，状況可能と時間的限定性及び叙述タイプについて確認する。状況可能は，動作主以外に外部の状況により事態が実現する（しない）ことを表す。状況可能の成立は，動作主の能力以外に外部の状況にある別要素がコントロールしている。そのため，状況可能と共に条件節もよく現れる。つまり，非過去時制の状況可能も未来に起きる事態の実現についての予測を表している。

（12）晴れた日には綺麗な写真が撮れる。

（13）太郎は自転車で行くので，9時前に大学に着ける。

（12）について，通常は「綺麗な写真」をとるために「いい天気」という状況が必要となる。「晴れる」という状況は事態を成立させる条件と見なすことができるため，状況可能となる。この例は，「晴れた日」の属性と解釈できるし，「綺麗な写真を撮る」という事態の属性にも解釈できる。一方，（13）は明確的に時間の限定性を受けるため，事象叙述に属する。このように外

部の状況に関わっても，動作主あるいは事態について明確な時間の限定性を受けない限り，事象叙述にはならない。この2つの例を過去時制の側面からみると，(13) の方はより過去時制を取りやすい。この理由は，(12) が未完了状態に偏っており，(13) がより事象性が高いためである。

4.1節で見たように，能力可能は基本的に動作主の恒常的属性あるいは恒常的属性の一時出現を表すものである。そのため，状況可能は，動作主が有する恒常的な属性を，外部の状況が活性化する。その結果，一時的に出現する。または，どのように出現するかが表される。ただし，能力可能は動作主あるいは動作対象の属性として解釈できるが，状況可能は動作主あるいは動作対象を含め事態全体の属性を表している。したがって，状況可能に関わる属性があるものの，実際に動作が実現できるか否かが未知である。これは能力可能における総称的な属性を表すものと最も異なる点である。このように，状況の可能の場合では，未完了状態や事象叙述を表す2種類のタイプがある。

4.3　評価可能

日本語の可能表現に関する議論の中で，「評価的属性段階」があると指摘されている（渋谷1993)。例えば，次の（14）は「この男の人は話がわかる」と解釈できて，（15）はあるお酒の性質について叙述している。そして，話し手の評価も表している。

（14）あいつは話せる（男だ）　（渋谷 1993：21）
（15）このお酒はつまみがなくても飲める。

（14）と（15）において，可能形式を用いることで本来の動詞「話す」や「飲む」の他動性を弱める。また，評価を表すには形容詞が多用されている。つまり，（14）と（15）における「話せる」「飲める」は形容詞化している。さらに，形容詞は話し手の主観を表しているため，形容詞化している可能表現も主観の反映と説明できる。そのうえ，評価の用法における可能表現は過去時制を取りにくく，慣習化されていると思われる。このような評価を表す可能表現は時間の限定性を受けにくいため，属性叙述という叙述タイプとなる。

つづいて，評価の用法の由来について確認する。(14) における「話す」は人間の属性であり誰でも有する能力である。外部の状況に関わらず能力可能として成立できる。一方，(15) は動作対象について叙述するものである。日本語では「この魚は生で食べられる」のように総称的な属性を表すことができる。しかし，このような「魚」に関する属性は（15）の例の性質と異なる。(15) の例では，お酒について個人差が考えられるため，動作主は話し手に限られている。つまり，動作主が特定の場合では，元々動作対象の属性を表す能力可能は動作主の主観に関わるため，評価の用法が派生できる。

（14）と（15）が評価の用法に解釈されるが，能力可能としての用法はなくなるわけではない。したがって，本稿では，これらの用法を可能表現の基本的な意味方法ではなく，二次的な用法として扱う。さらに，「話し手の主観の反映」という点はこの用法の派生する制約条件と思われる。

4.4　意図成就

川村（2004）は，可能表現について「意図成就」の用法があると指摘している。川村（2004）によると，意図成就とは意図した行為の意図通りの実現を表している。意図的行為の実現それ自体を問題にするものである。さらに，「可能」とは別の意味を表すものと認めざるを得ないと述べている。しかし，加藤（2015）で指摘したように，意図成就の解釈は，「可能状態」から「意図通りの実現」へと事態が移行したと理解するものである。また，意図成就の用法は過去時制の可能表現しか持っていない。したがって，本稿では，意図成就を可能とは別のものではなく，可能の延長線上にあるものとして捉える。特に，時間軸において可能との関係性がある。

例えば，（16）は時間の限定を受けるため，事象叙述となる。（17）は非過去形に入れ替える例である。非過去形の場合は，時間の展開と共に変動する可能性があるが，始点と終点を明示できない未完了状態として動作主の習慣を表している。いわゆる，意図成就は可能表現に関する未完了状態の一時的出現となる。つまり，過去時制の関与で，可能表現の叙述タイプは未完了状態から事象叙述へ変わった。

（16）今朝は，目覚し時計無しでも朝6時に起きられた。　（川村 2004：117）
（17）目覚し時計無しでも朝6時に起きられる。

次は，意図成就と能力可能や状況可能との関係を確認する。（18）について非過去形の場合は，動作主の属性を外部状況によって活性化するため状況可能と解釈できる。このような状況可能は明示的に時間的限定性を受けないかつ時間の展開と共に変化可能であるため，未完了状態と解釈できる。また，意図通り実現できる場合があれば，（19）のように成就しない場合もある。しかし，成就したかや成就しないかに関わらず，過去における事態の始点や終点が想定できるため，事象叙述という叙述タイプは変わらない。

（18）三日でレポートが書ける。
（19）三日でレポートが書けると思ったら，書けなかった。
（20）6 km なんて，昔，（簡単に）走れたよ。

タ形の可能形式を用いる意図成就は，通常時間の限定を受けることが多いが，（20）のような

時間の限定を受けながら，過去の時間にある状態を表すものもある。この状態が今の時点までに継続しているか否かは不明である。ただし，このように元々能力可能を表す属性叙述文は，過去における事象に近づけると考えられる。つまり，タ形を用いて，可能構文の叙述タイプが変わる。

4.5　テイル型の一時性と過程変化

従来，不適格とみなされる可能表現のテイル形は現在広く見られている。テイル形の可能構文はタ形の形式と同様に，事態の実現が要求されている。ただし，加藤（2012）で指摘したようにテイル形の可能構文は現在成立している事象についても必然的ではなく偶発的な面が有り，現在の事態がそのまま継続するわけではなく，成立しなくなるという認識があることになる。例えば，例（21）である。

（21）太郎は今日，いつもより上手に英語を喋れている。

（21）は，動作主が行う動作が実現されており，一時的に可能状態が継続している。また，（21）について「太郎は，今までそんなに喋れなかったが，今は喋れるようになった」という状態の変化が伴っている。そして，このような一時的可能状態は成立しなくなる可能性が高いためより広い時間軸上において「可能状態の進行」としてみることができる。さらに「今日」のような時間の限定を受けるため，太郎の属性を叙述するより事態の全体について叙述していると考える。そのため，本稿では，テイル形を用いる可能構文は事象叙述として捉える。

5．まとめと今後の課題

以上のように，本稿は可能表現について形式を整理してから，文の叙述タイプという側面から可能表現の意味用法を再検討した。まず，時間的限定性の観点から，時間軸上の両極に事象叙述と属性叙述を位置付けたうえで，事象叙述により近い位置に完了状態及び属性叙述により近い位置に未完了状態という２つの範疇を設定した。また，この分類によって可能表現の各用法の叙述タイプを分析した。

日本語の可能表現は，可能の原因により能力可能や状況可能に分けることが多い。この２つの用法には動作主あるいは動作対象に関わる時間的限定性をほぼ受けない性質があることが共通している。本稿はこのような共通点に着目し，叙述タイプと関連付けながら，能力に関する属性は可能表現の意味基盤であることと主張した。さらに，このような意味基盤があるため，能力可能及び状況可能を次のように解釈できる。

（22）能力可能は基本的に動作主の恒常的属性あるいは恒常的属性の一時出現を表すものである。

（23）状況可能は，動作主が有する恒常的な属性を，外部の状況が活性化する。その結果，一時的に出現する。または，どのように出現するかが表される。

そして，可能表現の成立制約，過去時制やテイル形の可能表現まで，時間的限定性という観点から統一的に解釈することを試みた。また，可能表現における格交替の現象も叙述タイプに深く関わると考えるため，今後は，今回の分析を踏まえて，否定の用例も広く取り上げて考察していきたいと考える。

（り　な・言語文学専攻）

参考文献

影山太郎（2008）「属性叙述と語形成」『叙述類型論』益岡隆志（編）くろしお出版　21-43

――――（2012）「属性叙述の文法的意義」『属性叙述の世界』影山太郎（編）くろしお出版 3-35

加藤重広（2012）「日本語における属性の事象化と一時性 ── 標準語と方言の差異に着目して ──」『属性叙述の世界』影山太郎（編）くろしお出版　113-141

――――（2015）「構文推意の語用論的分析：可能構文を中心に」『北海道大学文学研究科紀要』146　259-293　北海道大学文学研究科

川村大（2004）「受身・自発・可能・尊敬 ── 動詞ラレル形の世界 ──」尾上圭介（編）『朝倉日本語講座 6　文法』東京：朝倉書店　105-127

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1 大阪大学文学部

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　Ⅰ』くろしお出版

益岡隆志（2008）「叙述類型論に向けて」『叙述類型論』益岡隆志（編）くろしお出版　3-18